



キリストの聖体 (ヨハネ 6:51-58)

いつもわたしの内におり、いつもその人の内にいる

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。」(6・) 二つの「内在」が語られています。「わたしもまたいつもその人の内にいる。」これはイエス様の肉を食べ、イエス様の血を飲むから当然です。

問題はもう一つの「内在」、「いつもわたしの内におり」のほうです。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり」とは、どういうことなのでしょう。食べる人、飲む人が、食べられる「肉」、飲まれる「血」の内にいる。考えるけど、説明ができません。どんな例えが、イエス様のみことばを活かすのでしょうか。

亡くなった、ちょっと上の先輩が、「私の体は半分がカレーでできていて、半分がうどんできています」と、真面目に言っていました。先輩の言葉は、興味深いです。もしそれが本当だとしたら、先輩の中にいつもカレーとうどんがいて、見方を変えれば、カレーとうどんの中に先輩がいると言えるかもしれません。そうすると、「いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる」は、別々のことを言っているのではなく、表裏一体となっている、そんな感じなのかもしれません。

表裏一体という表現が、イエス様のみことばを活かすとしたら、「わたしの肉をたべ、わたしの血を飲む者」は、もちろんイエス様がその人の内にいますが、同時にその人は、この世にある他のものの中には決して存在してなくて、イエス様のうちにだけ存在する人になるのではないのでしょうか。聖体拝領する人は、イエス様のうちにしか存在することはできなくなる。そしてイエス様は拝領したその人の内にもいつもいてくださる。表裏一体、そう言えるかもしれません。

全存在を与えるお方が、私の内におられます。すると私は、全存在を与えるイエスの内にも、存在できる。これが中田神父の精一杯の説明です。まだ私が言いたいことは続きます。全存在を与えるイエスの内に存在を置く私たちは、イエスの内にいるあいだに何か変化は起こらないのでしょうか。お風呂の中に、あるいは夏の海水浴で海の中に、あまりにも長くいると手のひらはシワシワになるでしょう。イエスの内にいる人も、イエスによって変容させられると考えるのはごく自然なことです。

どのように変容させられるのでしょうか。聖体のイエスの中にいるのですから、私たちは自分を与え尽くす者、自分を全面的に差し出す者になっていくのではないのでしょうか。聖体は、初聖体を受けたお子さんから、最期の旅路の糧として聖体を受ける者にまで及びます。初聖体を受けたお子さんは笑顔で、喜びいっぱいですから、顔に現れた喜びを集まったすべての人に与え尽くします。

最期の旅路の糧として聖体を受けた人は、この聖体が決して自分を

飢えさせることがない、聖体を受けたことで確かに「道・真理・命」であるキリストに自分を全面的に委ねる姿に変わります。こう言ってよければ、「いつもわたしの内におり」というのは、聖体を受けた私たちが「聖体となっていく」ということを指しているのではないのでしょうか。

「すべてを与え尽くす人」「すべてを差し出す人」は、すでに「第二の聖体」となっており、聖体をまだ受けていない人に聖体へと導く案内人になるのだと思います。聖体を拝領し、「いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる」このことを体験し、体験した人はまだ体験していない人を体験へと導くのです。

それは、一度でも聖体を拝領した人、今は寝たきりとか、部屋から一歩も出ることができないとか、そんな劣悪な環境にあっても、「第二の聖体」としての働きは可能だし、きっと誰かを聖体へと導くのです。今ここに集まっている人も、今ここに集まれない人も、聖体はその人を活かし、誰かを聖体へと導いているのです。

「キリストの聖体」は、ある時制定されて祝われるようになった単なる祭日なのではなく、今ここで、この時代に、誰かを「第二の聖体」となし、誰かを聖体へと導いている。「キリストの聖体」は、今この時にも、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる」を実現しているのです。

あなたは、聖体を拝領して、何を与える者となったのでしょうか。聖体拝領によって何を差し出す人と変えられたのでしょうか。聖体拝領が、自らを与える者となり、自らを差し出す人となってこそ、現代にも「キリストの聖体」は意味を持つのだと思います。聖体を拝領できず苦しい思いをしている人でさえも、「私は飢え乾いています」と、聖体の本質的な部分を現代に証言しているのです。

年間第 11 主日(マタイ 9:36-10:8)